

I 特集 災害研究にどう取り組むのか

「面白い」災害研究をめざして

名古屋大学大学院環境学研究科准教授

室井 研二

災害研究にどう取り組むか。この問いは理系の研究者にとってはそう難しい問いではないかもしれない。理学系であれ、工学系であれ、検証すべき課題や研究の方法は分野によっておのずと明らかであるように思う。しかし社会科学、とりわけ社会学の場合、この問いは厄介な問いである。それは、そうした自明性が社会学的な災害研究には存在しないためである。災害は社会学という学問の歴史や体系の中で必ずしも内部化されてはいない。社会学の概論的なテキストや授業で災害が取り上げられることもまずない。確かに、阪神大震災以降、災害研究は社会学の中でもそれなりに認知されるようになったが、数ある連字符社会学の中ではかなり傍流に位置しているのが現状ではないか。

個人的経験を振り返っても、何を研究したらよいかで思い悩むことが多かった。私が初めて災害調査に関わったのは1990年に発生した雲仙普賢岳噴火災害であるが、当時、災害の研究に携わる社会学者はきわめて少なかった。アメリカに災害社会学という分野があることを知り何冊か読んでみたが、系譜的、内容的にオーソドックスな社会学とは異質で、ある種の違和感を禁じ得なかった。東大の新聞研などで災害情報に関する研究もある程度蓄積されていたが、これもまた特殊技術的な問題に思え、実務的には重要なのだろうけれども、学問的な面白さという点では私の関心を惹くものではなかった。この「重要だけど面白くない」というのが、災害研究につきまとう一般的なイメージなのだろうとも思う。大きな災害が起こると一時的に災害研究ブームが沸き起こるが、しばらくするとブームは沈静化する。その繰り返しである。災害研究のこうした外発性、一過性は、単に災害がたまにしか起きない現象であることだけでなく、研究の「面白なさ」に由来する部分も大きいように思われる。したがって、「どうすれば面白くなるか」が社会学的な災害研究で問われるべき大きな課題であると考えられる。

この点に関し、私にとって1つの転機となったのが、2003年に九州で発生した集中豪雨災害の調査である。この調査の何が面白かったのかというと、その災害が都市化や開発と密接に絡み合って発現した災害であったことである。普賢岳災害の場合は、火山災害であったため、災害の発生源という観点から社会に目を向けることはなかった。しかし、人為性の強い都市水害の場合、災害を理解するということが社会を理解するということがほぼ重なり合うものである。中でも、地域の土地利用の変遷に関する調査は興味深いものであった。農事水利組合という団体の存在、それが地域の農業水利や治水に果たしてきた役

割や、都市化に伴うその変化に関するヒアリングは、当時の私にとってゾクゾクする体験であった。ちょうどその頃、Mark PellingやBen Wisnerらの研究を知ったが、そこで問題とされていた論点は同調査で私が直面していた問題ともマッチするものであった。そして、こうした調査はオーソドックスな都市社会学的研究とも連続性をもつものであり、かつ都市社会学の既存のパラダイムに環境論的な観点から批判的再検討を迫っているようにも思われた。そのことが私には「面白い」と思われたのである。

名古屋大学に赴任してからは、スマトラ地震の災害復興に関する調査に参加することになった。私にとって初めての海外調査なので苦勞も多いが、他方ではこれまでにない面白さも感じている。東日本大震災の研究では、復興過程の行政主導性やその土木工学的対策への偏向がしばしば問題とされるが、そうした経験を他国の災害と比較して相対化するという試みは社会学ではほとんどなされていないように思う。かくいう私も名大に来るまではそうだったのだが、実際に海外調査に従事する中で得られた、自国をみる視野が相対化されていく感覚は新鮮な体験であった。とりわけ巨大災害といった危機の局面には、当該社会の根本的な構成原理のようなものが照射される側面があるように思う。私にとってのスマトラ地震研究の面白さも、単に防災上の関心というよりも、災害が垣間見せる社会の深層構造や、そうした部分での比較文化理解の面白さに由来しているのだろうと思う。その意味で、私にとって災害は、研究の対象であるだけでなく、研究のパースペクティブとして方法論的意義をもつものでもある。

冒頭の問いに立ち返りたい。「災害研究にどう取り組むか」を、「どうすれば災害研究が面白くなるか」に置き換えて若干の検討を試みた。まとめるなら、私にとってこの点で重要なことは、災害研究を都市や地域に関するオーソドックスな社会学的研究に内部化し、災害研究の裾野を広げること、またその一方で、災害を切り口とした観点から社会学のパラダイムそのものを批判的に再検討し、その見直しや活性化を図ることである。そうした意味で、防災に特化した災害社会学的研究から脱却することである。もっとも、これは魅力的ではあるけど、大変困難な課題でもある。また他方で、現実的な防災の観点を欠いた災害研究も無意味であろう。自然科学とはまた異なる観点から、社会学に独自の防災への貢献が求められることもいうまでもない。両者の現実的な折り合いをどうつけるか。災害研究の魅力にとり憑かれる一方で、その難しさに頭を悩ます日々である。

私が考える災害社会学

名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座教授

田中重好

災害社会学についての教科書的な説明は別の機会にすることにして、私自身が「災害」